

櫻井知愛

ガネーシャの審判

人
物

越 信 創 悟 (4 4) 小 説 家

相 橋 寛 人 (3 5) 越 信 の 担 当 編 集 者

奥 奏 美 (2 6) 相 橋 の 会 社 の 後 輩

通 り す が り の 男

○道

スーツケースを引いて歩く越信創悟
(44)。肩にはショルダーバッグ。

通りすがりの男が越信の肩にぶつかる。
バッグからガネーシヤの置物が落ちる。

越信が手を伸ばすよりも早く、ガネー
シヤを拾い上げる奥奏美(26)。

奏美「大丈夫ですか？」

越信、奏美を見て息を飲む。

越信「……」

奏美「あの……」

越信、奏美を見て固まっている。

奏美「かわいいゾウ、ですね」

越信、ハツとしてガネーシヤを受け取
ると、足早に去って行く。

きよとんと取り残される奏美。

相橋の声「奥さん」

奏美の後ろから相橋寛人(35)がやっ
てくる。

奏美「相橋さん、お疲れ様です」

相橋「ごめんごめん、遅くなって。行こうか」

相橋のスマホが鳴る。

相橋「あれ、また先生だ……。もしもし？どうしました？もうすぐ店に……。」

越信の声「降りました」

相橋「はい？」

○喫茶店・前

スマホを耳に当て、歩いて来る越信。

喫茶店の前でぴたと立ち止まり

越信「降臨しました。私の女神が」

ガネーシャを空に掲げる越信。

○喫茶店・客席

ボックス席に座って固まっている越信。

越信の向かいに座る奏美と相橋。

相橋「言いましたよね？紹介したい人がいるから連れて来るって」

奏美に視線が釘付けの越信。

相橋「彼女が、先生の新しい担当になる奥さ

んです」

越信「……」

相橋「先生、聞いてます？」

越信「……え？ああ、えっと……」

相橋「だから、彼女が奥さんです」

激しくむせかえる越信。

相橋「先生、大丈夫ですか？」

越信「そ、そうなんですか……」

奏美「あの、すみません。新しい名刺がまだ

出来てなくて」

越信、奏美から視線を逸らす。

越信「いりませんよ……そんな物……」

奏美「え……」

相橋「そ、そうだ先生。さっきの話は何だっ

たんです？女神が降りたとか何とかって」

越信「さあ何の事だったか。人は呼吸と共に

記憶を吐き出し、新たな記憶を吸うのです」

相橋「でも、見つけて来たんですよね？その、

創作の……神？」

越信「君はヒンドゥー教の神が3億3千万ほ

どいると知らないのですか？日本中の中から君を見つけ出すよりも困難な事だというのに」

相橋「それが三ヶ月インドで休暇を取って出た答えですか……」

越信「だから私が小説家でいられるのではないでしょうか。誰にでもヒット作が書けるようになつては、私は必要なくなります」

相橋「先生の新作を楽しみに待っている読者が沢山いるんですから」

越信「神は全て見ている」

テーブルの上にガネーシャを置く越信。

越信「その時が来れば、どこにいたって私の元に降りてくる。その時を待つだけです」

テーブルの上に佇むガネーシャ。

奏美「あ……あれ、店員さん来ないですね。

忙しいのかな。私、注文してきます」

逃げるように席を立つ奏美。

相橋、奏美が離れたのを確かめて

相橋「先生、コラムの連載はいけますよね」

越信「私は新作に集中したいので、これまで通りでお願いします」

相橋「また僕が先生のふりして書くって事ですか？」

越信「この世の中で名前が生きている事が重要なんです。人は忘れる生き物ですから」

相橋「僕にだって他の先生の担当もあるんですよ。そんなに時間が……」

テーブルの上に銀行の封筒を出す越信。

越信「引き続き内密に」

相橋「でも……」

奏美が戻り、慌てて封筒をスーツの内ポケットにしまう相橋。

越信「それにしても、結婚したなんて一言も聞いていませんでしたが……」

相橋「え？……ああ……」

相橋、左手を広げる。薬指に指輪。

相橋「つい最近なんです。先生には、帰国されてからゆっくり報告しようと思って」

越信「……そうなんですか」

相橋のスマホが鳴る。

相橋「あ、すいません。ちょっと……」

相橋が席を離れる。

越信「……」

奏美「……あ、あの……さっきはすみませんでした。私、越信先生だと気がつかず……」

越信「……ゾウではありません。ガネーシャという、ヒンドウ教の神の一人です」

席を立つ越信。

奏美、不安げにガネーシャを見つめる。

○同・トイレ・前

狭い廊下の奥にあるトイレ。

トイレの前で電話している相橋。

越信が歩いて来る。

相橋「うん、大丈夫。今日は遅くならない予定だから。帰ってから一緒に食べよう」

越信、隠れるように壁に身を寄せる。

相橋「うん、うん。俺も愛してるよ」
息を止める越信。

○同・客席

奏美、膝の上でスマホを見る。

受信メッセージ『上司との面接組めたから。ファッション誌やりたいなら、迷ってないで早くこつちおいで』。
ため息を吐く奏美。

越信が足早に戻ってきて席に着く。

奏美、隠すようにスマホを伏せる。

越信「君は……隠し事をどう思いますか？」

奏美「か、隠し事、ですか……？」

スマホを握りしめる奏美。

奏美「……隠し事の全てが悪いわけではない
と思います……」

奏美、ガネーシャをちらつと見る。

奏美「でも、いつかは必ず、言わなきゃいけない
時が来ますよね……」

越信「分かっていてなぜはつきり言わないんですか？」

奏美「そうですね。ちゃんと話さないとい
けないですよ。手遅れになる前に……」

越信「相橋君という人は、いつもどこを向いているのでしょうか……」

奏美「私のはつきりすればいいだけの事です、私が悪いんです」

越信「君は健気さが自分の武器だと思っているのかもしれませんが、それでは自分の首を締めているだけです」

奏美「先生……」

越信「こんな屈辱、君にはふさわしくない。だって君は私のめが……」

奏美「メガ……？あつ、先生のコーヒー、メガサイズが良かったですか？」

越信「君をこの泥沼から救い出してみせます」
奏美「え……？」

相橋が戻って来る。

相橋「すみません。ちよつと別件で」

越信、一度咳払いをして

越信「一夫多妻制を認める宗教や部族は確かにいます。しかしインドでもそれは法律で禁じられていた。私がない間に、日本の

法律は変わってしまったのでしょうか」

相橋「何ですか？新作のアイディアですか？」

越信「君の返答によつてはそうなるかもしれない
ませんね」

相橋「ええ……一夫多妻制が認められている
世界っていうのも、面白いと思います」

越信「たった今、これまでの君への恩は霧と
なつて消えました」

相橋「は？え？」

越信「相橋君、今すぐ彼女との関係を白紙に
戻しなさい」

奏美「えっ！」

相橋「白紙に？先生、そんなに気に入らな
かったですか？」

越信「傷の浅い今の内に彼女を救うんです。

その腐敗した深淵から彼女を解放しなさい」

相橋「……あれがバレない様について事か……
ていうか腐敗って……」

奏美「そ……そんなにブラックって事……？」

相橋「なんだ、良かった。先生もヤバイ事だ

と思つてらっしゃったんですね」

越信「当たり前です。君がやっている事は、
清らかな心を踏み躪る外道の行為だ！」

相橋「そこまで言われる筋合いは無い気がし
ますけど……まあ詐欺みたいなものですよ
ね、あんな事」

越信「とうとう自分の悪事を認めるんですね」

相橋「人としてやってはいけない事だと思ひ
ます。やっぱり今すぐやめるべきです！」

越信「事実を消し去る事は出来ない。しかし
君がこの関係から消える事は出来ます！」

相橋「わかりました。本当に、いいんですね？」

越信「誰に頭を下げるべきかは自分の胸に手
を当てて聞いてみなさい！」

相橋、胸元に手を持って行き、テーブ
ルに銀行の封筒を出して頭を下げる。

相橋「今までお世話になりました！」

奏美「先生、私も気持ちしが固まりました」

立ち上がり、頭を下げる奏美。

ガネーシャと目を合わせる越信。

© 2024 Chie Sakurai

櫻
井
知
愛